

2. 1969年2月、茨城県下公立中学校の女生徒とその父兄、技術・家庭科担当教諭、大学生1129名を標本とし、二段層化無作為抽出法により選んだ。回収率は85.7%であった。女子向き内容を表わす20項目につき、生徒が中学3年間で学習する内容として、重要度を5段階評定尺度法により評定させた。

3. 1) 技術・家庭科女子向き内容の女生徒にたいする重要性は、中学校教育全体の中で高く認識されている。その順位は家庭生活の科学化や合理化に関する知識や態度習得、次に衣・食・電気・保育の技術習得、次に工的分野に関する項目である。

2) 住居、保育に関する項目は、男生徒にたいしても重要性が認識されている。

3) 管理者と教諭、教諭と大学生の間には重要度の認識に多くの一致がみられ、教諭と女生徒、女生徒と父兄の間には差がみられる。

4) 教諭、管理者、大学生、女生徒、父兄の順に重要度の認識が高く、それぞれ重視する分野に特徴がみられる。

## G-2 家庭科教育に関する研究（第1報）

### —中学校技術・家庭科教育内容に関する意識調査

茨城大教育 村山 淑子

1. 家庭科教育内容の価値が、学校教育の中でどのように受けとめられているかを明らかにし、家庭科教育改善の資料とする為に、茨城県において、教育内容の重要度をどのように考えるか意識調査を行なった。第1報では中学校技術・家庭科について報告する。